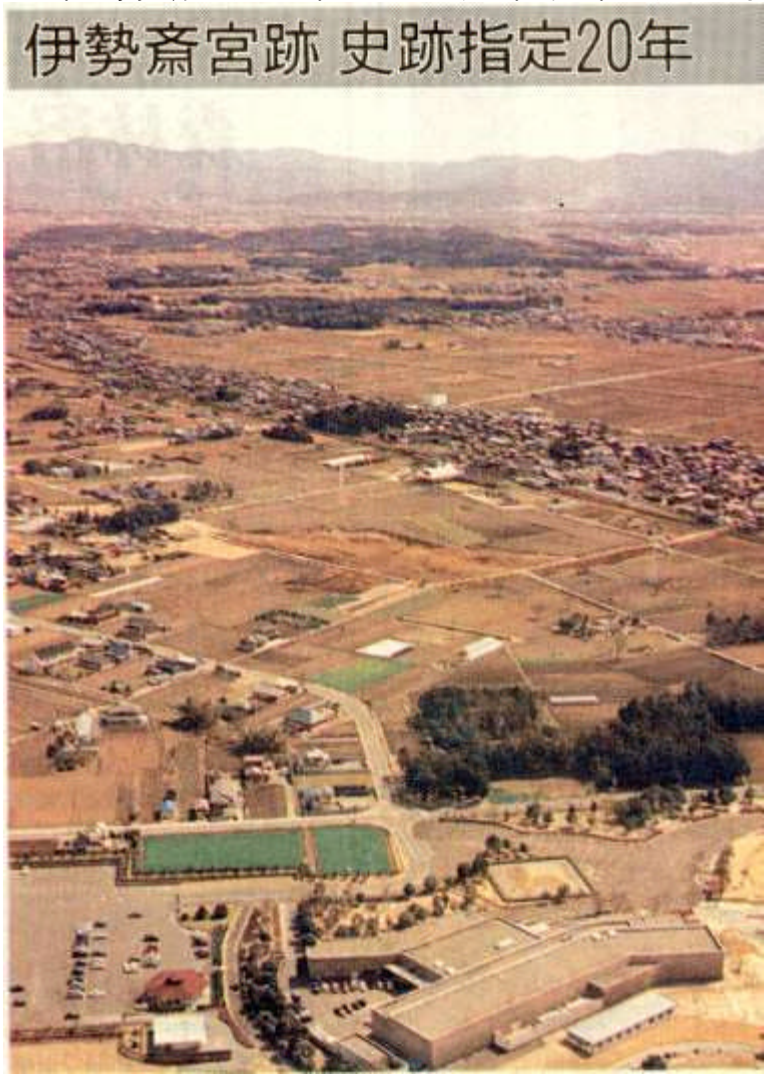
■眠り覚ました「幻の宮」

三重県伊勢市の伊勢神宮から北西十数キロ、同県明和町の斎宮（さいくう）跡が国の史跡に指定されてから、この三月末で満二十年になる。七世紀後半から十四世紀にかけての六百六十年間、天皇の代理として未婚の皇女らがここに派遣され、斎王（さいおう）の名で神宮に奉仕した。その姿は「伊勢物語」などの文学作品にも描かれているが、建物が残っていたわけでもなく、約三十年前に遺跡が発見されるまで、長い間、「幻の宮」となっていた。

名古屋から約一時間半、近鉄山田線斎宮駅で降りて北側に出ると、一面の畑にナバナ、ブロッコリー、ネギ、ソラマメなどが植えられていた。



空から見た斎宮跡。中央右の町並みの中に近鉄山田線斎宮駅がある。右下の建物は斎宮歴史博物館。／撮影・松谷常弘＝三重県明和町で、本社ヘリから

■畑の下に遺構

斎宮跡は近鉄の線路を挟んで東西二キロ、南北七百メートルに広がっている。広さは百三十七・一ヘクタールあり、甲子園球場の三十四倍にあたる。瓢据調査では、畑を数十センチも掘れば遺構が姿を現し、土器が出た。

「幻の宮」の永い眠りを覚ましたのは、一九七〇年の民間企業による宅地開発計画がきっかけだった。七三年度から本格的に始まった発掘調査は、これまで百二十六次にわたる。

駅の北約一キロに「斎王の森」がある。畑の多いこの辺りでは珍しく木が茂る。伝承ではここに斎王の御殿があったとされてきた。実際の位置はずれていたが、発掘で確認された掘っ立て柱建物の一部や井戸、道路がここに再現されている。

斎王は、未婚の皇女（天皇の娘）や女王（天皇の娘以外の皇族）から選ばれ、都から派遣された。巫子（みこ）のような存在だったとか、人身御供だったとか、政治的在天皇の代理者だったとか、様々な見方がある。

「伊勢物語」は斎王、恬子（やすこ）内親王と、斎宮を訪れた在原業平との夢のような一夜を描いた。だが、この愛は実らない。斎王の多くが十五歳までの若い女性だったことを思うと、華やかさより悲劇の雰囲気を色濃く感じる。

■斎宮歴史博物館

三重県立斎宮歴史博物館は駅の北西へ歩いて十五分ほどのところにあった。史跡の中の博物館で、遺構を傷めないよう、基礎を使わない特殊な工法で八九年秋に開館した。斎宮の建築物をコンピューター・グラフィックスなどで見せ、斎王の暮らしぶりを紹介している。

■一八〇〇棟の建物跡

往時の都から出た木簡などで確認される最初の斎王は、壬申の乱（六七二年）で勝利した天武天皇の娘、大来皇女（おおくのひめみこ）である。斎王は天皇が代わるごとに占いで選ばれた。神宮へ参宮したのは六月と十二月の月次祭、九月の神嘗祭の年三回だ。

斎宮が最も華やいだ平安時代前期（九世紀）、斎宮寮とよばれた役所には五百二十人の役人がいたといわれる。しかし、この制度も幕府の力が増すにつれて衰微し、南北朝期の一三三三年ごろに途絶えた。それまでの斎王は六十数人。その後、この地は荒れた。

「延喜式」などの文献によると、斎宮には斎王が住んだ内院、斎宮寮の頭（かみ）が執務した中院と、財政、調理、医療、建物管理などの役所が並ぶ外陀があった。奈良時代終わりから平安時代初めには、寝殿は斎王が交代するごとに建て替えられ、位置も移動した。

斎宮跡では、わずか数十㌢の土の下に、おびただしい数の掘っ立て柱建物の穴が見つかり、千八百棟の建物跡が確認された。

「驚いたのは柱の大きさだった」と博物館・調査研究担当主幹のと駒田利治さん。大きなものは直径四十五㌢。高さは分からないが、平城京と肩を並べる太さだった。礎石に支えられるかわらぶきの建物はない。すべてひわだぶき、かやぶきで、古い神社を思わせた。

注目された成果は、史跡東部で見つかった方格地割といわれる平安前期の整然とした区画割りだ。一辺百二十㍍を原則にした区画が南北四列、東西七列で配置されていた。都から遠く離れたこの地に、碁盤の目のように造られた都と同じような出先機関をつくったらしい。

一区画だけ二重の板塀跡を持つところが見つかった。すぐそばを近鉄線が通っており、全容は明らかになっていないが、内院の寝殿らしい。西に、斎王が儀式に臨む出居殿（でいどの）があった。広大な斎宮の復元模型図が、こうした発見によってできていった。

■主な出土品

斎王の持ち物は、交代のたびに都へ持ち帰ったため、多くは発掘でも見つかっていない。だが、緑釉（りょくゆう）陶器、すずり類、土馬などの祭祀（さいし）遺物が出土し、大きな穴の土器溜（どきだめ）で儀式に使ったと思われる多量の土器が見つかった。

■今月末から全国巡回展

三重県明和町のダイコン畑の下に遺跡があると確信されたのは一九七〇年ごろ。七九年三月には国の史跡に指定された。九八年度までの計画調査面積は十一万三千九百五十一平方㍍で、住宅新築など土地の現状変更に伴う調査が七万四千六百十九平方㍍。土器が九割を占める出土物の量は縦五十四㌢、横三十四㌢、深さ十五㌢の箱で九千三百五個になった。それでも発掘調査が済んだ率は全体の一三・七五％にすぎない。

三重県立斎宮歴史博物館の収蔵品は、今月末から八月にかけて、横浜、高松、福岡、大阪各市で展示される。

担当の岸田早苗学芸員の話では、展示物は、発掘による出土品、斎王制度やそれを維持した斎宮寮などを理解できる史料、「源氏物語」「伊勢物語」などの文学作品に登場する斎王たちの個人史など、多彩なものになるという。

■巡回展の日程

▽３月２７日－５月５日　　横浜市歴史博物館
▽５月１３日－６月６日　　高松市歴史資料館
▽６月１２日－７月１８日　福岡市博物館
▽７月２４日－８月２９日　大阪市立博物館。

（朝日新聞　１９９９．３．１６　夕刊　にゅうすらうんじ　３面　２版　大幅に加工しました）